
ご注文は？～魔法使いで！～ シーズン2

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「注文は？～魔法使いで！～ シーズン2

【Zコード】

N8293C

【作者名】

雨月

【あらすじ】

魔法がひそかにはやっていた世界。魔法を使えるようになった零時と零時の師匠の話！今回はセレネの妹、『古代魔法振興会』の人間も登場！

(前書き)

以前短編で出した小説の続きです。以前は感想などが多くれば連載をするといつていきましたが、今回は感想などが多かつた場合は続きを短編のほうで書きたいと思います。

二、

俺の名前は剣山零時つるぎやまれいじだ。高校二年生……半年ほど前に魔法使いとなり、魔法使いには一種類いることを知った。そして、半人前という名目上、俺には師匠がいる。

「零時、今日も特訓よ！」

「へへへ」

今日も月が出ていた下で俺たち一人は近所の公園、対峙していたのだった。お互いに腕には魔力の結晶の剣を作り出している。

先ほども述べたとおり、魔法には一種類あるらしい。

一つ目は普通の魔法。

とくにこれには名前など使われておらず、一種類目の古代魔法よりも扱いが簡単で使用者の精神状態などで威力が変わるらしい。

欠点としては一つの魔法を使用しているときはほかの事に意識がなかなか向けることが出来ないということだそうだ。

そして二つ目、俺が使うことが出来るのが古代魔法。

これはかなり前に使用者が死んでしまっており、これは絶えたらしいのだが最近、それを遣うことが出来るものたちが少數ながら、いるそうだ。いわば絶滅危惧種に位置づけられているといつていい。古代魔法は普通の魔法よりも扱いが難しく、精神状態よりも元からの素質でその威力が変わってしまうらしいのだが、何かをすればその威力が上がるそうだ。

さて、説明はこのくらいにして集中しないと……

「でやあああああ……！」

元気よく俺の胸を薙なぎごうとしてくる相手に対して俺は足にまるで天使の羽が生えたかのように飛び退る。

「逃げてばっかじや勝てないわよ！」

燃えるような瞳を俺に向けながら俺の師匠……セレネ・ルーナは

出していた魔力を消してすぐに左手で威力の高い火の玉を俺に飛ばしていく。

「勝つも何も決闘じやないんだから・・・・・」

俺は飛んできた火の玉を水の剣で切り落としてさらに間合いを広げる。遠距離の魔法を使用しない俺にとっては少々、つらい間合いではあるが、これは相手であるセレネもそうである。大体、セレネの指導の下で半年間練習をつんできた割には伸びていくのは近距離戦、増えていくのは擦り傷きり傷である。そろそろ遠距離の攻撃魔法を使用したいものだなあ・・・

「ほんと隙を突かれるわよ！」

普通の魔法使いであるセレネは、一つの魔法しか使用できないのだが、いかんせん、彼女の師匠である人物からは、「セレネ自身もコントロールが出来ていない！」との指摘をもらつており、飛んでくる火の玉の大きさは田によつて変わる。ちなみに今日の大きさは・・・

「田は何かいいことでもあるがな」

作の方法を二種に分けるべきである。

「あーあ、髪の毛がこげちまつた・・・」

月が見える自室から俺は月を眺めていた。月はいいねえ・・・心が洗われるようだ。見ていろだけで飽きないし、きっと用ではウサギたちが餅つきを飽きもせずに毎日毎日やっているにちがいない。きっと、地球のウサギとは違つて前足で餅をついているはずだから・・・マツチヨなウサギに進化するんだろうなあ・・・・

「零時、いつまでぼあ～つとしてるのよ？休憩時間はとっくに終わってるわよ？さっきから手が進んでないわ！」

「おこなう。」

月を見ていた俺の横からセレネが顔を突き出してくる。体を動かした後に頭を動かすのは少々おいたが過ぎると思うのだが、師匠の言つことは絶対なので反対は禁止なのである。

「きちんとやっておかないとこざつて時に役に立たないわ…」「わかつてますつて…」

いましているのは魔法についてのお勉強……ではなく、普通に高校の勉強をしている。半年間の間に俺はセレネのほうがテストの点数がいいことを知り、これは教えてもらえば俺もいい点をとることが出来るに違いないと思つて教えをこいたのだ。だから、普段は機械の絵をかいている時間を少々割いて勉強を教えてもらつている。

いつもと同じように今日も終わると思ったのだが…

「…零時、今度の日曜日ちょっとと会つてもらいたい人がいるんだけど…大丈夫？」

唐突にそんなことをセレネが尋ねてきたので俺は首をかしげただつた。

「日曜日？ああ、大丈夫だと思つけど…母さんだつて何もいつてなかつただろ？」

「…それなら日曜日のお昼に駅前に行つてくれないかな？私、その日ちょっと用事があつて…」

非常に浮かない顔をしている。しかし、それを見せまいと努力をしているらしく、その顔には苦渋の色がにじみ出している。そして、顔には

「うう、また師匠に呼び出されちゃつた…死んだらどうなるのかしら？」という疑問が書かれていたのだった。

「はあ、またあの人からのお呼び出しか…骨は拾つてやるからがんばれよ！」

「そ、そんなあ…わかつたんなら何か慰めの言葉をかけてよ…」

「…墓は大理石と花崗岩、どっちがいい？ああ、花崗岩つてのは白と黒の…」

「し、死なないから大丈夫よ…ちょっとお皿を割つただけ！」

セレネと俺は同じ場所でバイトをしている。三人で一組の班分け制なのだが、この前俺が熱を出してしまったときにセレネは何かをしてかしてきたらしい……

「何枚割つた？」

俺の予想では十七枚ほどかと思ったのだが……

「さ、三十枚ぐらいかな？」

「それってちょっととか？お前のちょっととは三十か？俺のちょっとは一枚か二枚だぞ？お前は『ガムちょっとだけ』といつたら三枚ももううのか？」

俺がそういうとセレネは顔を真っ赤にして反論してきたのだった。

「う、うるさいわね！誰のせいでお皿を割つたと思つてるのよ！」

「俺？俺がお前に『皿を割れ～皿を割れ～』というようなテレパシーでも送つたと思ってんのか？皿の処理をいつもしてるのは俺だぞ、俺。心配こそすれ、お前に皿を割つて欲しいとは思つてないぞ」「違うわよ！私は熱を出してた零時が心配だっただけ！あ～もうつ！気分が悪いから私はもう寝るわ！」

一気に捲し上げたあと、俺のベッドに入り込んでそのままいびきをかき始めたのだった。驚愕している俺は目を何度もぱちぱちやつた後に恥ずかしいような感じに陥つて部屋を後にしようとしたのだった。

「・・・零時のバカ！」

扉を閉めるとき、そんなセレネの寝言が聞こえてきたのだった。

「・・・すまん、セレネ」

俺は寝ているセレネにそうこういひたとやらの部屋から逃げ出しだのだった。

言付けられたとおり、日曜日俺は毎時に駅前の『桃の銅像』の前に立っていたのだった。

結局、あの日の次の日からセレネは出かけたままであり、相性セレ

ネの師匠であるそる師匠にお叱りをうけているようだ。まあ、そんなことよりきちんとあたりを見てやら無いと……今、辺りではカツプルたちがどこかに言つたりしている光景が目に映つている。俺は暇だったのでねじを取り出すとそれを手の中で転がし始めた。なんだか変な人物が先ほどから視界の端に映つてゐるのがうつとうしいな……

ねじをいじり始めて約一時間……俺の手にねじの跡がしつかりと残つた時間ぐらいに一人の女の子が俺に話しかけてきたのだった。

「あの、すみません……」

そちらのほうを見ると巨大なねじが立つていた。

「！」

いや、よくよく見ればそれはねじを両手でふうふう言いながら持つてゐる女の子だった。銀髪に目は青い。外国人さんのようなのが、流暢な日本語を話しているところを見ると意外と日本にいる日が長いのかもしれない。

「……おかしいですね、姉さんは『ねじを見たらうれしそうな顔をする人』つていってたんですけど……」

小首をかしげてゐる相手に俺は少々

「ああ、まだ残暑が残つてるから頭をやられたのかな?」と思いつながら話しかけたのだった。

「……あの、俺に何か用があるんじゃないのか?」

「ああ、そうでした! 実は、人を探しててですね……機械好きでお兄さんのような髪形をしていて調子に乗ると付け上がるような人物を知りませんか? 名前は剣山零時つて言つそうです。ええと……」

そういうてねじをあつという間に消して俺ののど元に魔法の剣を突きつける。

「……魔法を使うことが出来るそつなんです……」

「……あなたがセレネが待つはずだった招待客か……剣山零時つて言つるのは俺だよ」

俺は両手を上げて降参のポーズをとつて相手に名乗る。」
「さすがに犯人だ！」
「すげえ……犯罪者だ！」
「いやみをしたらあつといふ間にお陀仏だ……

「よかつた、すぐに見つかって……」

「でもよ、あんたがくるはずだったのは一時間ほど前だつたじゃないのか？俺はセレネにそいつわれたぞ？」次の電車だつて後五分後にこの駅につくし……」

「ええ、私も一時間ほど前から探しました……自己紹介が遅れましたね、私の名前はセレン・ルーナつていいます。あなたのお世話になつていてるセレネ・ルーナの妹です。よろしくお願ひしますね」「差し出された右腕を俺は掴むことなく、その場から離れた。

「……さすがですね……」

右手じや友好的な態度を示しながら左手にはしつかり魔力の剣が握られていたりする。つまり、握手をしていたらぐせつてせしていたに違いない。

「握手を求めてきても相手はもしかしたら左手であなたを狙つてきているかもしません。今後も気をつけてくださいね」

「……疑心暗鬼になるようなことはやめて欲しいなあ……」

「さ、今度は大丈夫ですよ。あなたを狙つている人物たちからあなたを守るのが私の役目ですからね。とりあえず姉さんのところに案内してください」

この危ない女の子の姉がセレネならばそれはそれで納得行くような気がする。うん、この少女は間違いなくあの妹さんに違いない。

「あ～わかった。じゃ、とりあえず俺の家に行くからついてきてくれないか？」

「わかりました。それではいきましょ」

「いづして俺とセレンは歩き出したのだつた。

「姉さんはどうですか？」

歩き出して数分、彼女はそのように尋ねてきた。

「どういう意味だ？」

「同居しているといつのは聞いたんですけど、どのような生活をおくっているんですか？」

「同居って……まあ、そうだろうナビ……」

悩んでいる俺に彼女は身を乗り出してきて俺の顔を覗き込む。

「甘い生活ですか？この前、姉さんから電話があつたんですけどとても嬉しそうでしたよ？」

「何かしたかな？俺？」

「朝とか起こしてもらひしているんですか？」

「ま、まあ・・・・・」

セレネが起こしてくれるから結構遅刻などはなくなつたのだが・・・

・まあ、それはいいや。

俺がそう考へているとセレンは小難しそうな顔をしながら

「・・・・むう、これは脈ありのようですが・・・まだまだですね。とりあえず姉さんにがんばつてもらわないと・・・」

そんなことを呟いていたのだった。

「ただいま

「おじゃまします」

一人して家に帰ってきたのだが、家の中には誰もいないのか静かだった。

「・・・鍵をかけずに外出は危ないことも気がつかないのか？大体だな、そんなことをしても泥棒さんだけが喜ぶんだぞ？鍵は閉めるためにあるんだ」

「いや、泥棒さんから見たら鍵は破るためにあるんですよ？」

「・・・・それはいいや。とりあえずなかに入つてくれ」

セレンを中心にあげて俺はお茶をセレンの前に出したのだった。彼女はお茶菓子をおいしそうに食べてお茶を品なく一気飲みして湯飲みを

「がちやん」と置くと俺のほうを見て「どう尋ねたのだった」。

「・・・私の部屋はどこですか？」

「・・・は？」

「私の部屋です。あなたを助けるためにいるんですから場所をいただかないと・・・ああ、押入れの上とか屋根の上とかは駄目ですよ？きちんととした部屋が欲しいですね」

お茶菓子が歯の間に詰まつたのか知らないが、爪楊枝を口に入れている。

「・・・お前、ここに止まるのか？」

「ええ、駄目だといつても私は住み着きますよ？家の前で猫にえさをあげると猫は何度もその家に来ます。それと一緒にですよ」

そういうてにやりと笑つた女の子に俺はため息をつきながら電話を取り出したのだった。

「あ、もしもし母さん？あの～非常に申し上げにくいことなんだけど・・・まさしく、セレネが家に下宿してるでしょ？明日からその妹さんがきていいかどうかたたずねているんだけど・・・あ、食費とかは自分で出すそうだからさ・・・どうかな？あ～いいの？本当にいいの？普通はここでおかしいって思わない？え、娘が出来たようでもうれしいだつて？・・・とりあえず、家に帰ってきて詳しく話すよ」

そこまで言つて俺は電話を切つたのだった。

「どうでした？」

せんべいをかじつている小娘を見下ろしながら俺は苦虫を噛み潰したような表情を見せた。そして、考えた。

「なぜだ？何故俺の母さんたちはどこのものかわからない人物をこうもあつさりと止めるんだ？」

「それはどう考へても姉さんが築き上げてきた信頼が大きいんだと思いますよ？どうです？この家で姉さんは何かしているんじゃないですか？」

俺はセレンにそういうわれて考えてみる。

「そりだな……それはあるかもしれん。夕食はセレネだし、俺の弁当を作ってくれているのもセレネだ。洗濯物は俺が取り込んでいるけどセレネのほうががんばってるな」

「そうでしょうね。どうです？姉さんは既にこの家の住人といっても過言ではない……」

「いや、お前も既にこの家の住人だろうがよ？」

「……た、確かに下宿人というのはそんなものでしょうね。とにかく！あなたは姉さんがいないと既に何も出来ないのではないんですか？」

セレネがいなくなつたら……どうなるだろう？

「そうだな、セレネがいなくなつたら……」

「ただいま！零時、セレンに会えた？」

俺は元気よく帰ってきたセレネをちょっと眺めて……

「あ～おかえり。どうだつた？」

「どうだつたも何も……角が生えてたよ」

「赤い角か？赤い角つけて三倍のスピードでやつてきたのか？」

「いや、もつとす」かつたよ！中央に赤い角で左右に鬼の角が生えてた！」

興奮しているセレネにセレンは咳払いした。

「ごほん！姉さん、久しぶりです」

「あ……セレン……久しぶり」

「さ、零時さん姉さんもいるんですよ……先ほどの続きを言つたらどうですか？」

「言つも何も……何を言つんだ？」

俺はそういうてしらばくれて逃げた。どこに？二階だ。それ以外に考えられんからな。セレネの顔を見て喜ぶ自分がいるのは事実なのだが、それはそういう感情ではないはずだ。

「まったく、恥ずかしがり屋なんですね」

「？」

一階には不思議がるセレネとため息をはくセレンが残されていた

のだった。

その夜、俺は外で頭を冷やしていた。知恵熱である。

「・・・・予測できない人物が来たな・・・」

咳き、夜空を俺は仰いだ。あの一人は今頃仲良くお風呂にでも入つているだろ？

「・・・はあ、古代魔法ねえ・・・」

「古代魔法がどうかしたのかしら？」

「！」

その場から飛びすさみ、声のしたほうをにじみつけた。

「誰だ？」

「誰？ そうね、レルファルと覚えておいでちょうどだい。あなたが剣山零時よね？」

「そうだが？ それがどうかしたか？」

さて、どうしたものだろ？ 黒いフードをかぶっているところを見るとこれは『古代魔法振興会』のものだと思つたが… セレネからは

「この地域ではそこまで衝突が起つてないわ」とか言つてんだが？ 「私と一緒に来てくれないかしら？」

「何故？」

「簡単なことよ、優秀な後輩を見つけては部活に勧誘する先輩と同じような心境ね。あなたのその非常に強い力は『古代魔法振興会』をもうちょっと活発にすることが出来るのよ。勿論、あなたにもそれ相応の場所が『えられる』ことでしょうね」

それに対する俺の答えは・・・・

「はつ、どうせ嘘に決まつてらあ…『氣をつけよつ、甘い言葉ときれくな姉ちゃん』絶対に罷だと言い切つてみせる！」

そう断言すると相手はちよつと驚いたような表情を見せた。 「あら、そういうわれるとは思わなかつたわ。まあ、罷でもなんでもないことは覚えておいて欲しいの。お近づきのしむしこれを…

・

「おいおい、俺がもので釣られる男とでも思つてゐるのか？」

「IJの黄金のねじを・・・」

「・・・いただこう・・・まあ、『古代魔法振興会』も別に悪い組織つてわけじゃないからな」

「じゃ、私はこれで・・・あ、それと・・・」
さりに近づいてきた相手が俺を抱きしめた・・・その事実に気づいた俺は当然のように驚いた。

「な、何を！」

「牽制つて思つといて・・・じゃあね」

レルファルはそつと俺から離れ、消えた。そして、俺の田にはいなくなつた彼女の向こうに・・・

「セ、セレネ！？」

「れ、零時の馬鹿あ！何よ、あの女は！もう知らない！」

「ちょっと、ちょっと！待つてくれよー！」

走り出したセレネを俺は追いかけないといけなかつたのだった。
しかし、追いつけないのは単に俺が足が遅いだけなのだろうか？

「は〜くしょい！」

家から閉め出された（否、追いつけなかつた）俺に待つていたのは寒い夜だつた。今日は空気が澄んでいるのか普段よりもお星様が俺の頭上であざ笑うかのように光つている。

「・・・夜風つてこんなに体に染みるんだな・・・」

鼻水をすりながら俺は体を動かすことにしてみたのだが・・・どうにも、寒いと何もやる気が起こらなかつた。

「ふふつ、寒そうね？」

「・・・レルファルか？」

「名前を覚えてもらつて光榮だわ

いや、まあ・・・あつてまだ三時間ほどしかたつていないので志れる馬鹿はいないと思うのだが？

「何かようか？」

暖かそうなコートを睨み付けながら俺は家の前に立っているレルファルに警戒する。

「そんなに寒いのなら私のコートを貸してあげましょうか？大丈夫、私厚着してるから……どうかしら？」

「そうか？それならお言葉に甘えて……」

俺はレルファルの目の前に立つて震える右手をまるで天使のよつなレルファルに差し出したのだった。

「あらら・・・あなた自身が冷えているのならコートを着ても意味がないんじゃない？」

「根性で暖かくするからいい」

「それより・・・ほら、これなら暖かいでしょう？」

「・・・・・

俺は黙るしかなかった。なぜなら、彼女は俺を抱きしめたからだ。三時間前にあつたばかりの女性に抱きしめられるとはまったく思わなかつた・・・いやいや、そういうえば三時間前もこんなことがあつて・・・・

「・・・零時、そんなに私に見せ付けたいの？」

魔王の声が後ろからしたような気がした。いや、気のせいに違いない。殺氣を感じた瞬間、俺の首根っこがつかまれ、後ろに引っ張られた。そのまま地面にぶつかるかと思ったのだが、なんだか柔らかな感触が後頭部にあたつた。

「せ、セレネ？」

「・・・あなた、私の弟子にちよつかいを出さないでもらいたいんだけど？」

頭の上のほうから声がしているので俺が今いる位置は・・・いや、考えないようにしてよ。今はそういうことを考えている場合ではない。

「・・・ちよつかい？何を言つてこるのかしら？これは正式な取引

よ

「取引？そんな方法で何を……」

「方法も何も、あなたが方法と思っている状況を作り出したのはあなたよ？あなたが剣山零時を家の中に入れてあげていればこんな状況になつていなかつたと私は思つわ？ま、そうしたとしてももつとすごい状況になつていたかもしれないけどね」

そうやって含み笑いをしている相手にセレネはカチンと来たのか指を鳴らした。右手で俺を思いつきり引き寄せて左手には炎が現れていた。

「…………さつさと帰つてよ」

「そ、ね、今日のところはあなたに免じて帰つてあげるわ。じゃ、剣山零時…………私はどんなことがあってもあなたを見捨てないわ。それだけは覚えておいてね」

そういうて彼女は闇をまとつて消えたのだった。

「…………反省してる？」

「…………はい、します」

残された俺たち二人…………夜空の真下で俺は頭を下げていた。

「…………まあ、今回は多めに見てあげるけど…………」

「しかし、よくよく考えてみたら何故俺はセレネにここまで言われるんだ？」

「何かいつた？」

「いえ、それは師匠の空耳かと…………」

「さ、家の中に入るわよ。あ、体が冷えちゃつた」

セレネは俺の手を引いて家の中に入ったのだった。玄関の電気は既に消えており、俺がつけようとするセレネはその手を制して俺を抱きしめたのだった。

「！」

「…………」

何も言わないセレネのせいで俺はおかしくなるかと思った。今まで冷え切っていた体に何故か熱が帯びてきて……顔なんか真っ

赤だろ？。

「…………零時、これで寒くないでしょ？。」

「あ、ああ・・・・・」

「ま、まあ・・・私も暖かくなれだし、わざと寝るわよ。明日も学校があるからね！」

俺はそういう足早に去つていったセレネの後を間抜けのように追いかけたのだった。

次の日、俺は何故か俺の隣で寝ていたセレンに尋ねたのだった。

「…………おこおい、何で俺の隣で寝てんだ？こんなところをまた見られたら・・・」

「大丈夫ですよ。これは姉さんが私に言つたことですからね」

「本当かよ？」

「本当ですよ」

そんなやり取りをしているとセレネがやつてきた。

「…………零時、何してるの？」

「何してるのって言つてるぞ、お前の姉ちゃん」

「…………節操ないのね？そんなにこの世に未練が無いのかしら？」

「なあ、俺はお前の姉ちゃんが魔王に見えてきたんだが・・・これいかに？」

「…………私が来たときは手もつけなかつたくせに・・・」

「病院連れて行つたほうがいいんじゃないのか？俺の田には赤黒く見えるぞ、お前の姉ちゃん・・・・」

「姉さんも朝から元気いっぱいでいいことですね」

朝っぱらからごめんこつむりたい残虐ファイトの後、俺はセレンに事情を説明してもらつた。

「…………確かにそついたけど誰も隣で寝てとはこつてないわ！」

「え、違うの？」

「違う！それなら私が・・・じゃなくて！セレンが守るところへれたから私はてっきり部屋の前にいるかと思ったのよー」

「でも、零時さん寝てるとき私を抱きしめてくれたよ？」

「零時い！」

なんだかおかしい連中も加わってきたようなのだが、俺は昨日の夜見てくれたセレネ的一面を大切にしたいと思つた。

「・・・セレネ、落ち着け！その一面は俺には必要ない！笑つて、

笑って？」

笑えなしんじやああああ！！！

はつきり言うが、セレネの妹は危険人物だ。

(後書き)

いつも、作者の雨月です。今回現れたセレンですが、先に言つておくとこの人物は連載のほつの新しい話でメインヒロインとして登場させたいと思っています。まあ、それがどうなるかはまだわかりませんけどね。では、感想などをよろしくお願ひします。作者でメッセージをくれた方にはメッセージを送ります。読者の方はよくわからないので連載のほうで大々的に？お礼を述べたいと思います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8293c/>

ご注文は？～魔法使いで！～ シーズン2

2010年10月8日15時45分発行